

特別寄稿

森の長城プロジェクトと心の復興

未来の子孫へ、私たちは何を残すべきか



公益財団法人瓦礫を活かす森の長城プロジェクト事務局

高橋 知明

東日本大震災からの復興は、心の復興の契機にしなければなりません。今こそ世界の人々に、自然との共生・日本人の和の心を発信すべき時と私は考えています。

三年前に震災が発生し、私の故郷・岩手県陸前高田市もまた壊滅的な被害を受けました。当時、神社本庁の職員だった私は、救援依頼を受けた岩手県神社庁に、本庁の先遣として東京都神社庁の皆様のご協力もいただきながら、救援物資を運びました。震災から約一週間後のことです。既に岩手県神社庁では、沿岸の神社に対して、連日必要物資の運搬作業と情報収集を行っていました。すぐさま私も物資を小分けにして、実家のある陸前高田市に向

かいました。覚悟はしていたものの故郷の風景に我が目を疑いながら、まだ水浸しの道路を進みました。本務社の月山神社(荒木眞水宮司・祖父)と、そこから少し離れた場所にある実家は、各々約二百名と約四十名を受け入れる避難所になっていました。実家の避難所では、男性は遺体捜索や夜警、女性は一日二回の炊出しと家族を捜して避難所巡り、子どもたちは土手でフキノトウを集め天ぷらにして夕食に一品を添え、お年寄りたちは若いお母さんたちのために、お祭りの日本手拭いなどを縫い合せ生理用品の代用品を作ったりと、各々誰かの役に立とうと生活をしていました。

震災直後、東北の人々は、難局を乗り越えるために老若男女問わず、各々ができることはなにか最大限に考え、助け合い、世界の人々から称賛されるほどの行動をしました。東北だけでなく、全国の人々が節電や様々な緊急支援などに協力したのは、災害大国・日本に生きる国民の有事における覚悟ある自然発生の行動だと感じました。しかしながら、人間は忘れ易く、欲深い動物でもあります。震災の教訓から、助け合いや感謝の精神がより向上した人々がいる一方、物資支援を受け、日常生活を徐々に取り戻す中で、足るを知ることを忘れ、必要以上に物や補償を得ようと行動をする人々も出てきたことは残念に感じます。

自然との共生

古来日本人は自然との共生を大切にしてきました。森林では奥山と里山の境界に神社や祠があり、生活に最低限必要な恵みを戴く里山の奥に、人間が犯してはならない神々が鎮まる奥山がありました。しかし、時代が進むにつれ、奥山にも人間の手が入り、材料となる杉・松・檜などを単一的に植林し、更には昭和四十年代から外材が流

とつては浄化作用かもしれません。急に自然と密着した生活はできませんが、できることから始めることが大切だと思います。

私は本庁にて震災から二年間、被災神社の調査などの仕事をさせていただきました。より震災復興に関する仕事をしたという思いから、「森の長城プロジェクト」に設立から関わりました。

森の長城プロジェクトは、東日本大震災被災地の人々の大切な思い出と財産だった瓦礫を、土と混ぜながら海岸線に盛土をし、その上に地元植生の常緑広葉樹の苗木を混植・密植し約十五年で根強い森に育てます。育った森は津波の勢いを和らげ、かつ多くの財産と命を守る森の防潮堤や一時避難場所となる命山と呼ばれる丘になります。

被災地では、依然として十四万人を超える人々が避難生活を送っています。住民の最大の関心は生活再建にあり、住宅高台移転の大規模造成等が始まっていますが、仮設



住宅暮らしの人々は高齢者も多いため、数年後に造成が完了しても家を再建するかどうかは判断が分かれる状況です。

一方、土地利用計画は着々と進み、半壊した大きな建物も解体され更地となり、仕分け処理された瓦礫の山が点在し、道路や海岸線工事のための用地買収も進み、湾を囲む最大高さ十四層ものコンクリート防潮堤建設事業や水門工事などが、住民の関心や希望が追いつかないところで進んでいます。

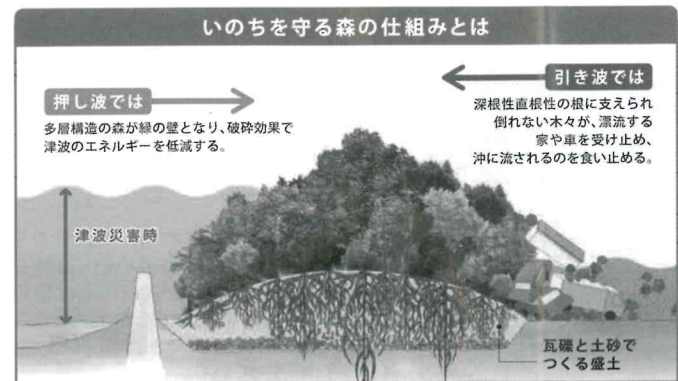
津波の教訓を活かした街づくりとは、どのようなものでしょうか。様々な考え方があろうかとは思いますが、何かあったら先ず高台へ避難するしかないであり、その土地ごとの地形変遷の歴史を検証した上で、高台への幅広い避難道の造成をすること、高台が遠い場所には、命山と呼ばれる一時避難場所となるような

乗り越えるために老若男女問わず、各々ができることはなにか最大限に考え、助け合い、世界の人々から称賛されるほどの行動をしました。東北だけでなく、全国の人々が節電や様々な緊急支援などに協力したのは、災害大国・日本に生きる国民の有事における覚悟ある自然発生の行動だと感じました。しかしながら、人間は忘れ易く、欲深い動物でもあります。震災の教訓から、助け合いや感謝の精神がより向上した人々がいる一方、物資支援を受け、日常生活を徐々に取り戻す中で、足るを知ることを忘れ、必要以上に物や補償を得ようと行動をする人々も出てきたことは残念に感じます。

入し森の循環が失われた結果、現在では花粉症・松喰虫・動物が人を襲う等被害が増加し、まさに自然のしつぺ返し、罰が当たったとしか言いようがない状況です。国土の六割が森林と言われる我が国ですが、古来の森は〇・〇六割しか残っていないそうです。豊かな森に雨が降り、豊かな川や地下水を育て、海を豊かにするという循環を崩した結果、様々な災害が発生しています。人間にとつては災害ですが、自然に

丘(例：宮城県岩沼市「千年希望の丘」創造事業や津波避難シェルターを築くこと等)以外は、できるだけ自然環境を活かした街づくりをすることが肝要かと思っています。

特に東北沿岸地域は、高齢者も多く過疎化が進み、今後人口減少も加速することが予想される中、復興交付金による巨大コンクリート防潮堤建設や、大規模高台造成等の計画は、特定の人々が一時的に利益を得られる反面、将来その構造物等の維持を任せる私たちの子孫に、多くの負担を強いる可能性があります。東北沿岸の最大の魅力は、都会にはない美しい自然、温かい地域社会、そして美味しい海山の幸です。この生活環境は豊かな心を持った人々を育てるだけでなく、観光面においても未来へ残すべき遺産です。



約六万本の植樹、約八千九百人が参加しました。本年も五月三十一日に宮城県岩沼市「千年希望の丘」で六万本を五千人の参加者で植樹します。植樹に必要な苗木や資材、植樹祭運営費のほとんどを、多くの皆様からのご寄付で賄っています。植樹祭の参加者は、なぜか笑顔になって帰られます。きっと植樹という命を育む活動に触れることで、童心に返り心が穏やかになるのだと思います。多くの人々がどんぐり拾い・育苗・植樹・草取りという森作りに参加することで、自然と上手に共生してきた日本人の心の復興にも繋がる事業になればと願っています。

東日本大震災を契機に、未来を担う子孫のために、我々は何を残してやれるのか。まさに神職として取り組むに値する事業とも考えています。当財団は多くの皆様からのご寄付で成り立っています。我々の子孫へ思いを至し、麗しい自然環境のある豊かな国土を東北から全国に残せるよう、このプロジェクトをぜひ応援して下さい。

プロジェクトの目指すもの

森の長城プロジェクトは、東日本大震災を契機として、自然環境に寄り添い、津波を減殺するための命を守る森の防潮堤を築こうと、横浜国立大学宮脇昭名誉教授指導のもと、被災地沿岸で広葉樹の植樹活動を始めました。昨年は宮城県・福島県で四回の植樹祭を行い、延べ

※森の長城プロジェクト URLはこちら http://greatforestwall.com/ 電話 〇三―三二七三―八八五一